

生活の自立

—自分のことは自分でしよう—

季刊まいづる前号では習い事の特集を組み、幼児期には何を大切にすべきかということを一緒に考えました。何よりも大切にするべきことは、子どもが今を幸せいに過ぎてしていること、それによって培われる自己肯定感ということでした。そしてその上で、幼児期には様々な力の土台作りを大事にしましようということと、それによって「生活の力」について特集を組みました。

それでは生活の力とはいつたいどのようにことを指すのでしょうか。具体的に考へること、それと同時に深く考察することで、今何を大切にするべきかが見えてくるかもしれません。どうぞ最後までお付き合いください。

アンケートへのご協力ありがとうございました。みなさんが親として何を心配しているのか、またどのような気持ちで我が子に臨んでいるのかがよくわかりました。はつとさせられるような鋭い意見やとてもいい工夫の仕方などもたくさん寄せていただきことができました。まずは、集まつたたくさんのアンケートをもとにして、いくつかの会話をつくってみました。少しでも参考にしていただけると幸いです。

自立ができることでも、親が一緒にいるところ「ママしてー」と言葉をかけている。

あるある。うちではなるべく自分でできることは自分でするように伝え、「できない時はおまかせてお母をかけているわ。

うちでは「着替えさせて」「タオルでふいて」という時は、手が届かないところを手伝うくらいにしているわ。でも考えてみると、眠い時に「嫌だー」「〇〇して」と言うことがタラいかも。

うん。大人でも同じですね。僕も自分が疲れている時は家で注意する時つい声を荒げてしまうことがあります。

私は逆に、自分のことは自分でする自分、だけが認められ受け入れられると子どもが思わないよ。気をつけてるわ。「万引きしたくない時もあるよねー。そんな〇〇も大歓迎だよ。つたまに大声をかけたり。





古かげしてもなかなか行動しないし、自分から意欲的に準備することもできないよね。

環境を整える工夫をしたいんだけど、何かいいいアイデアはないかしら？

うちではこんな工夫をしてるわよ。

①自分が考えて行動しやすいように、棚や引き出しに表示(絵と文字)を貼る。

②着がえを入れる場所は引き出しだとぐちゃぐちゃになりやすくて、大人の目も届きにくいから、棚にカゴを入れて使っている。

③「やりたい」「手伝いたい」と言いつとキは、できただけしてもらう。毎日の手伝いにせず、楽しい、うれしい気持ちが残るみうに、無理はしない。大人が手伝うことも多いし、「手伝わない」と言わされたら見守る。

大人が細かくしつこく言つと気持ちがなえてしまうので、私はあまりしつこすぎないように気をつけているわ。

私は基本的に本人に任せてるわ。私が手を出したり選択するときに、対して子どもが嫌がるから、本人に任せた方が、互いにストレスなく過ごせるわよ。

幼稚園の荷物をよく忘れるのよねー。何も持たないで行ったり、バックを忘れて帰ったり。うちは朝の準備が遅いわねえ。私が「うう、今がどうから?」言わないで、「なんていうけどせーんぜん!」小学校に行くのに大丈夫かしら。

幼稚園の荷物をよく忘れるのよねー。何も持たないで行ったり、バックを忘れて帰ったり。うちは朝の準備が遅いわねえ。私が「うう、今がどうから?」言わないで、「なんていうけどせーんぜん!

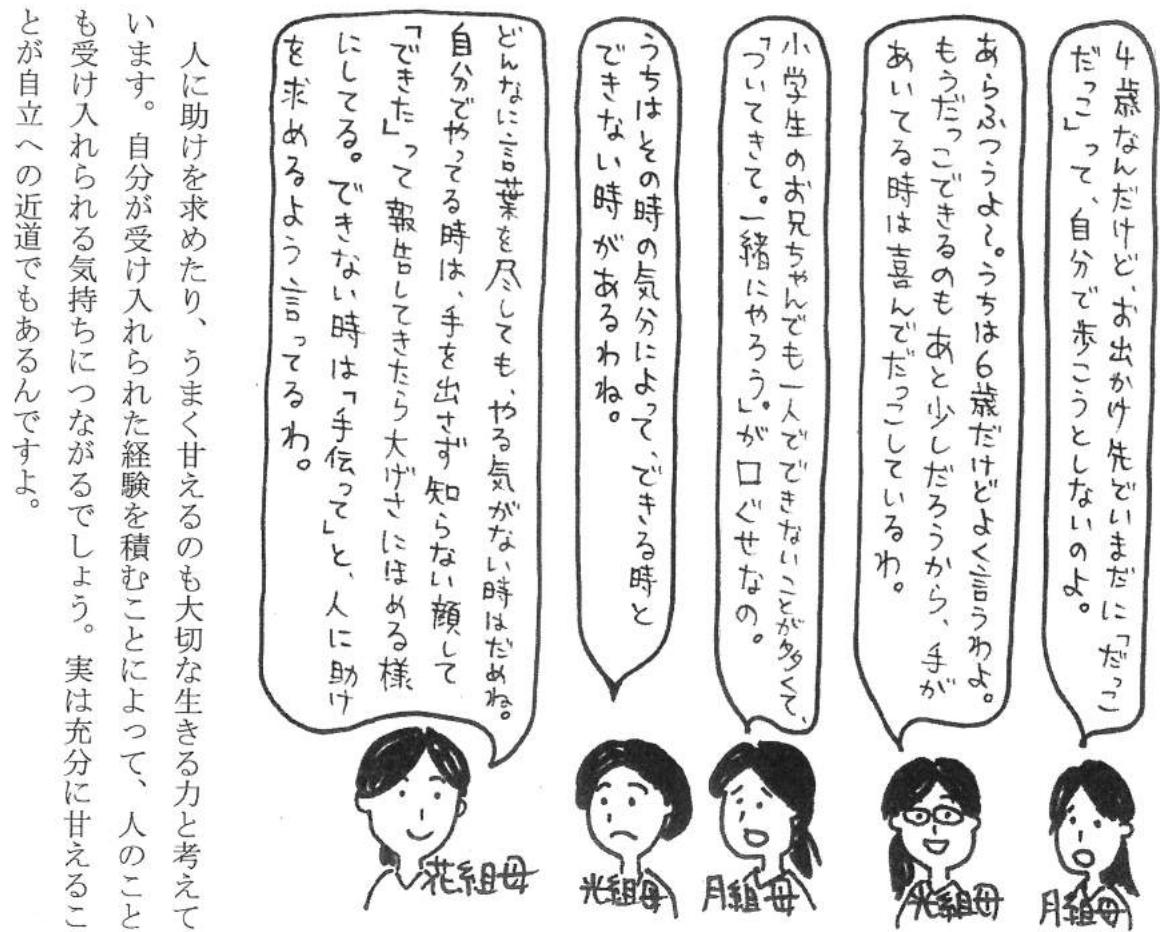
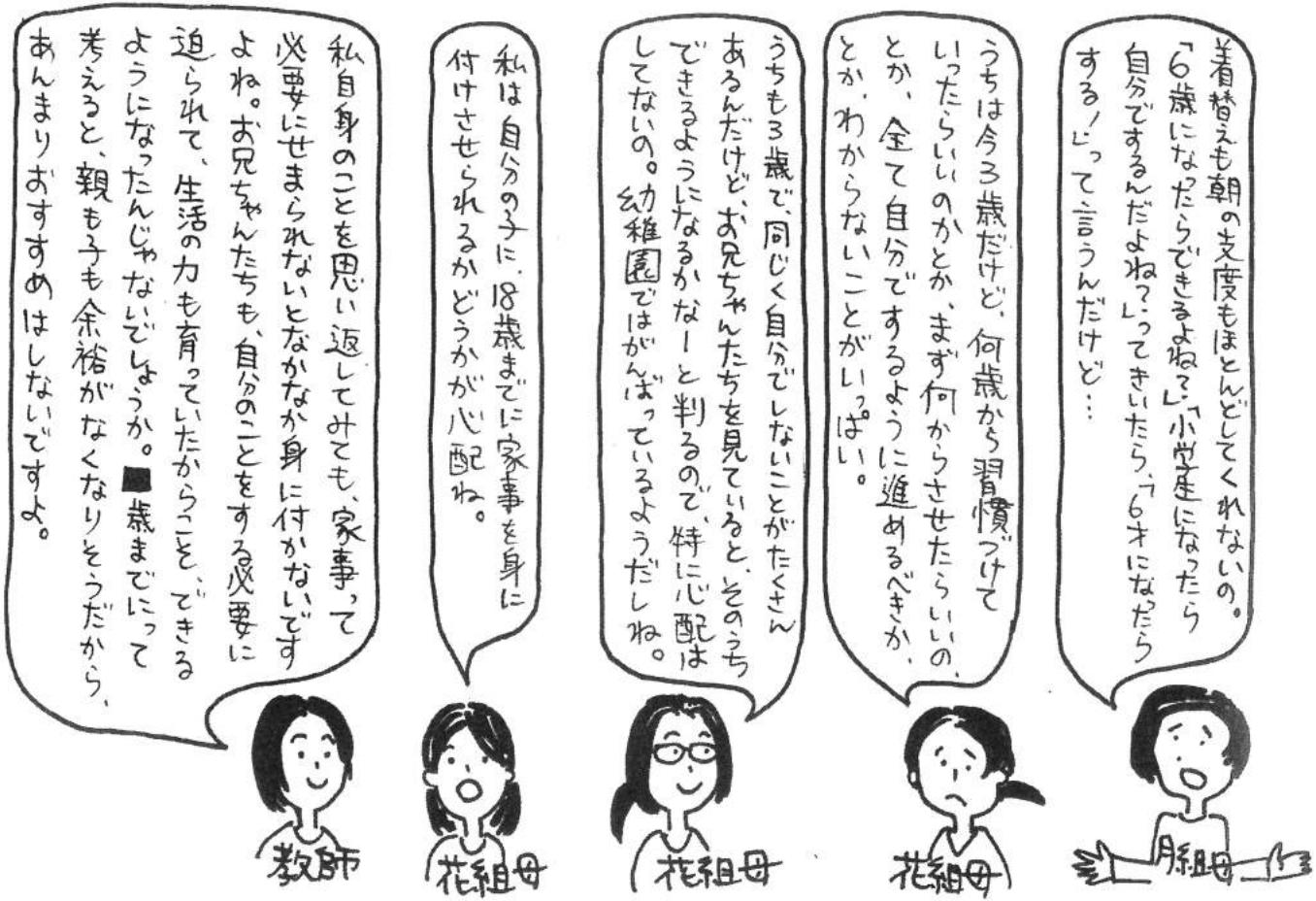
それが誰の問題かを考えるといいですね。どの結果困るのは誰か。遅刻したり忘れ物をして困るのは必ずもって親ではありません。生活の力を身に付けさせるには、困るのは親ではありません。生活の力を身に付けさせるには、困る経験をさせることも必要です。少なくとも、親が怒ることはないはずです。(アドラー「宿題の公開会議」)

卒業生母

教師

花組母
月組母

誰にもいざれくる宿題の問題。家での学習で一番大事なことは、勉強することの楽しさを失わないようにすることです。学習意欲さえあれば、いずれ自ずと理解は深りますが、できたできないにこだわりすぎると、勉強も宿題も嫌なものにしか感じなくなってしまいます。宿題が難しいなら、楽になるようどんどん手伝えいましょう。意欲さえキープできていれば、あとは教えるプロ(教師)にまかせるのが一番の得策です。



人に助けを求めたり、うまく甘えるのも大切な生きる力と考えています。自分が受け入れられた経験を積むことによって、人のことも受け入れられる気持ちにつながるでしょう。実は充分に甘えることが自立への近道でもあるんですよ。

帰ってきたら「コートをかけて、お弁当を出して、タオルを洗濯機に入れる」で流れを覚えさせたいんだけどなかなかね。床にゴミが落ちただら拾つてゴミ箱に捨てるとか、出した物は元の場所へ戻すとか、おだり上刑だけどくせつけてほしいわ。

帰ってきたら「コートをかけて、お弁当を出して、タオルを洗濯機に入れる」で流れを覚えさせたいんだけどなかなかね。床にゴミが落ちただら拾つてゴミ箱に捨てるとか、出した物は元の場所へ戻すとか、おだり上刑だけどくせつけてほしいわ。



月組母



月組母

きうりう時はペナントリをつくるといいわよ。うちではタオルを出さなかつたら昨日と同じの持つてかなキヤだし、弁当を出さなかつたらタバコペーパーにしめるか弁当なしでいいわ。おもちゃ箱からこぼれたものは捨てて決めてると「おばいやばい」と面白がるみたい。自分が責任をとるかけだから・私が怒る必要もないしね。



卒業生母

わざと困る場面をつくるという意味で、ペナントリ

というやり方は使えますね。どの時に大事なのは話しあい(説教ではなく)で、それをすることの大切さを分かつてもらつた上で、対等の約束をすることですね。つまり、子どもだけではなく、大人もちゃんと約束を守ることです。

僕自身できないことはばかりだから約束できません。



教師

将来の不安を考えないこと。今分からないことを不安に思わず、今できる将来できるようになるかもしれない楽しいことだけを考えるようにしています。

私自身未熟な面もたくさんあり、毎日毎日それと向き合い、大人になつても成長していくのだと思います。そういう姿を子どもにもそなつてほしいと思うような姿を、まずは私自身が行うことで、子どもの将来にもつながるのかなと思います。

「生活の自立」とは“生活全般を自らきりもりしていく力”だとすると、それは日々反復し、体で獲得していくことだと思います。幼児期は根気強く声かけし、共に取組み、出来るようになつていく、そのプロセスを大切にしたいと思っています。

月組母

光組母

他にも紹介したい意見や答えたい質問などが数多くありました。これから親同士のおしゃべりの中で、また教師とお家の方とのお話しの中で深めていけたらいいなと思います。

次ページより、園での具体的な子どもたちの姿を学年毎に紹介しながら、生活に関する力について考えてみます。

自分のことは自分でするって、一体どんなこと？

幼児期だけを見れば、基本的生活習慣を身に付けることが主になるでしょうが、これは何も子どもに限ったことではありません。私たち大人も、社会で生きる一員として、自分のこと（自分たちのこと）を自ら考えやっていくことは必要なことです。子どもの姿を見る前に、まずは自分の姿を振り返って見てみましょう。

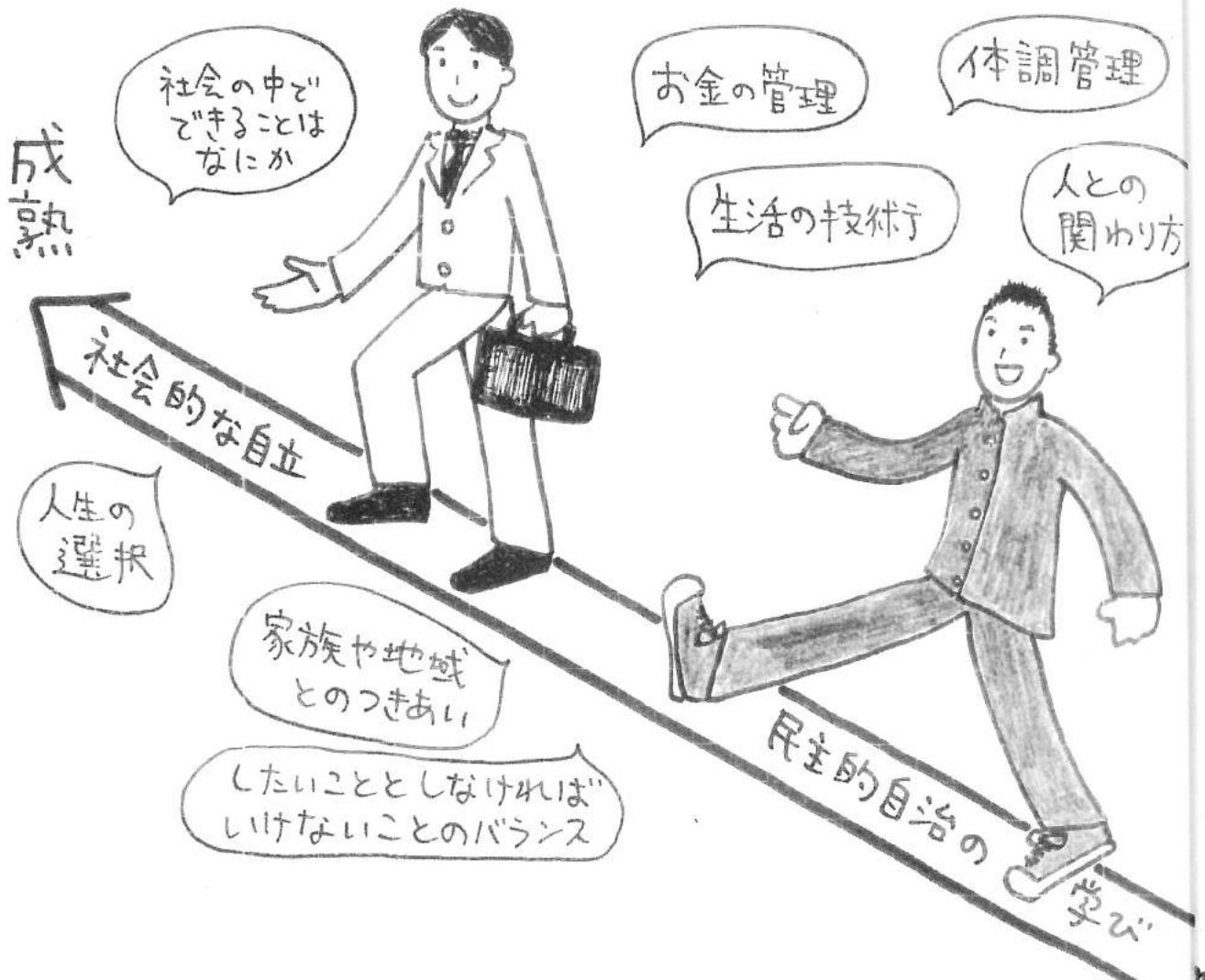
私たちはひとりひとり違う人間です。得手不得手もあるでしょう。何でもできる完璧な人間などどこにもいません。私たちは家庭で、家庭外で、お互いを補い合いながらそれぞれの社会を運営しています。そんな中、親としての焦りや責任感から、子どもには完璧を求めすぎではありませんか？生活の技術を伝えていくことは大人として大切な仕事ではありますが、あくまで子ども達も私たちと共に生活や社会を営む同じ仲間として接したいものです。

この図は生活に関する子供の成長のかなり先まで見通した縮図です。生活の自立—「自己的ことは自分でする」—を突き詰めて考えていくと、自分はどんな生き方をしたいと考え、それをいかに自らの責任で選びとつていけるか、ということまでいきます。

つまり、自分の人生を自分で生きる、ということ。

自分は他人の人生を生きてはいけないし、逆もまたしかり。それは親子であろうとも同じことです。





この図を念頭に置いて、それでは今の幼児期に、生活の自立に向け大切にすべきことは何なのか、考えてみましょう。

- ① 生活の力を身に付けるために一番大切なのは、できるできないではなく、やろうとしているかどうか

いろいろなことを自分の力でやりたいという意欲、お兄ちゃんお姉ちゃんや大人と同じことをしたいという意欲を持つことです。

遊びにしても学びにしても、子ども自身の中に“したい”“なりたい”という気持ちがない限り、大人側からどんなに促しても、それによる行動からは、自立に向けての最大の効果は得られないでしょう。逆に言えば、そのような意欲を持ち続ける限り、“こうなりたい”と思っている姿に確実に近づいていくものです。つまり親がすべきことは、生活の技術を教え身に付けさせる前に、「年長者への憧れを育むこと」そして「子どもが自分でやりたいと思う気持ちをなるべく邪魔しないで膨らませること」です。その気持ちと大人の援助や技術の伝達が組み合わさった時、まさに最大の効果が発揮されるでしょう。

家事はお父さんも含めた家族全員で取り組むといいでしよう。生活に関するモデルはすぐ身近にいて、その毎日が記憶として子どもの中に積み込まれていき、それが自立への準備ともなります。自分がしようともしないことを人に要求するのは、人間

関係として偏つていいと思っています。親子であろうと対等な人間同士ということは忘れないようにしたいものです。

そのように考えていくと、自分のことを自分でした時やお手伝いをしたときに「ほめる」というのも一考が必要かもしれません。まだ子どもが小さいうちはその方が自然でいいかもしれませんが、共に生活を営む仲間の一員としては、できたことの喜びに「共感する」、手伝つてくれたことに「感謝する」というのが自然な姿のような気がします。大人がそのような態度に移行していくことで、自立に向けての意欲は次の段階へと入つていくでしよう。

② 自立していくためにはたくさんの失敗を経験することが必要不可欠

幼児期の子ども達は、生活技術も十分に身についてはいないし、いろんな経験も浅いものです。お手伝いや身のまわりのことを上手くできる子の方が少ないので当たり前です。事前の準備や余裕を持つての片付けなども、見通しの力がまだ身についていない子（それは発達の過程で仕方ないこと）にとっては、考えたり気を付けたりすればできるというものでもありません。

それでは生活の力とは、どのような時に身についていくのでしょうか、そしてどのようにして身に付けさせたらいいのでしょうか。そこで考えたのが次の三箇条です。

- 1、成長の過程で身につくのを待つ
- 2、失敗経験を繰り返し、成功体験を積んでいく
- 3、本人にとつて必要なことは自ずと身についていく

子どもの成長はひとりひとり緩急がまちまちで、絶対に大人の思

う通りにはいかないし予測もつきません。早い遅いがそのまま良い悪いでもありません。その子の成長の仕方を邪魔せず無理させず見守ることが最大の援助とも言えます。生活の力に関する同じことです。排泄や着替えなど、大人になるにしたがつて必ずできるようになるだろうという力に関しては、焦らずおおらかに見ることが、親にとつても子にとつても穏やかに日々過ごせるコツでしよう。

しかしながら、ほつとくだけでは中々身につかない力も確かにあります。身のまわりの物の管理や片付け。料理、洗濯、掃除などの家事。ある程度先を見通して行動することなど、親が心配する事柄の大部分はそういう力かもしれません。そういった力を身に付けるためには何が必要なのでしょうか。

それは大人がその力を身に付けてきた過程を思い出せば分かりやすいでしょう。私たちは何かを本当の意味で学んだり身に付けたりするためには、自分の腑に落ちる経験というものが必要不可欠です。知識として知っていることと、実際に自分が経験の中できかみ取つたものとでは、一体どちらが自分にとっての力強さを持つでしょうか。経験する大切さはまさにそこにあります。

誰でも経験が少ないと聞いては中々上手くできません。失敗しながらでも経験を積んでいくことこそが、様々な力を身に付ける唯一の道です。子ども達にはたくさんの失敗を経験させてあげましょう。子どもが困る経験を奪ってはいけません。臆さず失敗を繰り返すことのできる雰囲気が、子どもを見守る環境には必要なのです。

子どもが困るのがかわいそうで、もしくは子どもの失敗を自分の失敗のように感じて手を出したり口を出したりはしていませんか。本当に子どものためを思うのなら、親として何をすべきかすべきでないか、一度ゆっくり考えてみるといいかもしれません。親自身がイライラしてつい口酸っぱく言つたり、時には怒鳴つたりしてしま

うのは仕方のないことだと思いますが、少なくともその行動にはあまり先々の効果がないことを知つておくことが必要です。くどくどと言ひ聞かせることは催眠行為であり、つまり解けてしまえば幻です。

子どもでも大人でも、自分が必要だと真剣に思つてすることは、失敗しながらでも自ずと身につけていくものです。親ができるのは、やり方を教えるとともに、それがいかに必要な力なのかを分かつてもらう努力をすることでしょう。

コラム ーあいさつについてー

子どもが挨拶をきちんとしない、大きな声で言えない、などの悩みを持つているご家庭が相当数いらっしゃるようです。挨拶は社会生活の基本マナーであり、小さいうちからしつかりと習慣づけなければというわけです。しかしそのような揺るぎない考え方で挨拶を促される子どもと親の前で、私たち教師は少し困ってしまいます。それはなぜでしょうか。

最近読んだ内田樹さんの本（『困難な成熟』）で、挨拶に関して私が腑に落ちた考察を読みましたので簡単に紹介します。

内田樹さんは、経済の緒元は物の交換ではなく贈与であるといふ贈与経済学の考えをよく展開していらっしゃいますが、挨拶も贈与、つまり祝福の贈り物であるということなのです。贈り物を受け取った人は、お返しをせずにはいられません。もしお返しができる状態ではなかつたとき、その人の中には後ろめたさが残ります。そしていずれ自分の状態が整つたとき、自ら贈り物を誰かに渡すことで、かつてのお返しを実行するのです。私たち教師は子どもに「君を見ているよ」「認めているよ」という気持ちを込めて挨拶を贈ります。その声を受け取つて全

くの無視で通り過ぎる子は一人もいません。小さい声でも、はにかんだ笑顔でも、恥ずかしそうに顔を伏せるでも、その子なりのお返しでしょう。そして私たち大人同士が挨拶を交わし合う姿を見て、未来の自分の姿に向けて準備しているのです。

私たちが子どもに向かう時、挨拶のマナーを伝えることももちろん大切ですが、まずは次世代への贈与として挨拶を贈り続けること、そして私たち大人同士が仲間としての挨拶を交わす姿を見せ続けることを、より大切にしたいと思います。（檜崎）

③ 生活の自立とは、自分で全部をできるようになることではない

前ページに書いたように、大人でも完璧な人間はいないのです。できる力を出し合つて、できなことは許し合つて嘗んでいく社会というものがいい社会と呼べるものではないでしょうか。そう考えると、人にうまく甘えるのも生活の力と言えます。「ママがやって」という言葉は、その第一歩なのかもしれませんね。

さて、今回の特集はいかがでしたでしょうか。生活のいろいろな力を身に付けるための工夫というより、生活の自立とは何かという根本を考える特集となりました。最後までお付き合いいただきありがとうございました。

生活の力は、同じ年齢・月齢の子どもでも、ひとりひとりどんなことができるかは全く違います。各家庭のお子さんひとりひとりの細かいことについては、担任の教師とご家庭とで連携をしつかり取りながら成長を見守つていきましょう。

悩み・質問・ご意見、いつでもお待ちしております。